

長崎大学は初めて
爆心地と
地続きになつた

卷之三

青來有二



いゆういち
長崎市生まれ。市立
学校、渾中、県立西
崎大学と、すべて爆
心地3km以内。今も長
崎資料館長として
。作家としては『聖
第124回芥川賞を受
ンネームの由来はア
ーラームーン』からと
るが「誤解です。本
います、観たこともな
もう面倒なので放
います(笑)』。本名
明俊さん。

作家と市役所の仕事はつながっている

社会で活躍している長崎大学の卒業生にインタビューする企画がスタート。

長崎原爆資料館の館長でもある青来有一さんとご登場いただきました。一九八一年教育学部の卒業生です。写真撮影のため、資料館のお隣にある国立追悼祈念館へ。

原爆資料館の来館者はとても多いのですが、実はここから専用通路で追悼祈念館に行くことがあります。被爆の妻參館を見学したあとはぜひ祈念館も訪ねてほしいですね。

な資料を見ただけで帰られるのも少し辛い。その後に追悼の時間を持つてもらえるといいな、と思います」。

作家として、一〇〇一年、『聖水』で第一二四回芥川賞を受賞。当時から長崎市役所職員だったことが話題になりました。

「四十代初めの受賞で、ある程度の年齢でしたから、まわりの状況もわかりましてね。こうした小説では食ってはいけないだろう；間違つても役所をやめてはいけないと（笑）」。

しかし定期的に作品を発表し伊藤整文学賞と谷崎潤一郎賞をダブル受賞した『爆心』は、映画化されて今年七月に公開とか。長崎口柯もあつたんですよね。

「はい。主演の北乃きいさんが長大のグラウンドで撮影するというので、文教だとばかり思つて駆けつけたら坂本キャンバスだった（笑）。寒い日に夏のシーンの撮影だというので、肉まんをたくさん差し入れましたよ。皆さん喜んでくれました。映画は楽しみですね」

それにもしても役所の仕事と作家活動の両立が大変でしょう。執筆はいつするんですか？

「夜型で、人が寂靜まってから書きます。日々の生活が自然に反映してきますね。市役所の仕事って人と出会うのが仕事で、そうした出会いや職場での経験が小説のヒントになることがあります。例えば文化財担当のとき、市の中心部の工事現場から、花十字の紋章がつ

いた瓦の破片がざくざく出てくるのに立ち会つたことがあります。そういう経験からマイマジネーションをふくらませることもあります」。

「いえ、長大生時代、本はよく読んでいました。濫読ですね。古い小説も、新しい小説も。文庫も、文芸雑誌も手当たり次第。村上春樹さんのデビュー作『風の歌を聴け』もリアルタイムで読みました。面白い人が出てきたなあと。サークルには入らず、友人數人と『ひまじんオネオネ俱楽部』とぶざけて名のつていました…」。

え？？オネオネって？

「深夜ラジオで笑福亭鶴光がよく使っていた表現で、ぼーっとしてゐる状態。『おねーおねーしてまんね

おねーおねーしてました（笑）」。
今でもそんな学生いそうです。

「一般教養の講義に遅刻して、あわてて教室を間違えて、文化人類学の講義に飛びこんだことがありました（笑）。周りは知らない学生ばかり。まあいいや、と聞き始めた面白くて、それをきっかけに文化人類学の本を読むように。あと西洋美術史の講義もおもしろくて、フレンツェを訪ねたときは感動したなあ。大学は専門家を養成する場所ではあるんだろうけれど、私には一般教養の講義がとてもおもしろかった。いろんな引き出しを持つことが大切だと、社会に出てから特に実感しますね」。



爆心地三km以内に
生きるということ

作家としてのテーマを「人間と神と信仰の関わり——人間は神様を棄ててきたのではないか」とし、長崎の歴史を題材にしながら心のなかを掘り下げていきたい、といふ青来さん。長崎で生きていく意味を見つめながら幅広く活動していく、こんな先輩がすぐ近くにいて大学に関わってくれる、なんとかも頼もしい存在です。

てきて、被爆の歴史を意識してきました。ところが大学に入るともこの場所には兵器工場があつて、多くの方が亡くなつたのも事実です。RECNAができたことで、長崎大学は長崎の大学としてやつと爆心地と地続きになりました」。

RECNA（核兵器廃絶研究センター）にも協議会副会長として参画されます。文教キャンパスにもときどき足を運ぶんですね。「はい、帰ってきたな」という気分です。大学で新しく作り上げていくもののお手伝いができるのは嬉しいことです。私は小中高校と

卷之三